

赤レンガ博物館

赤れんが博物館 レポート（1）

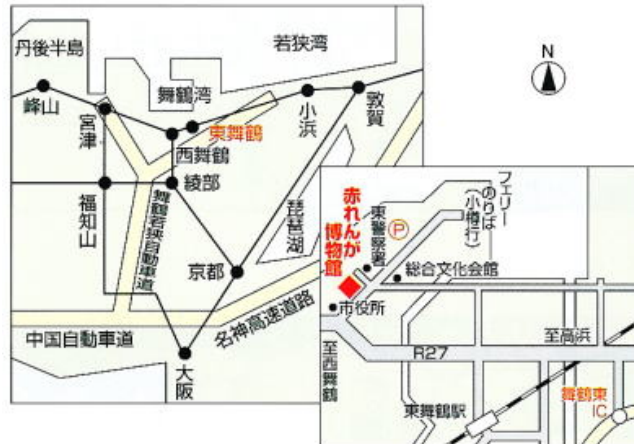
2004年10月2日

○施設概要

所在地：〒625-0036
京都府舞鶴市浜20 1番地

TEL：0773-66-1095
FAX：0773-64-5123

開館時間：AM9:00～PM5:00
休館日：年末年始（12月29日～1月3日）
入館料：一般300円 学生150円



京都府の日本海側、若狭湾に面する舞鶴市は、「天橋立」とも近く、若狭地方最大の都市である。中高年齢層以上にとっては、舞鶴といえば軍港であり、戦後の引き揚げが真っ先に想起されるだろう。リアス式海岸地形によって半島に隠されたような舞鶴湾は、なるほど海戦時代は、船がその存在を隠して敵の侵攻にいち早く対応するのにベストな地勢だったことが容易に想像できる。旧日本海軍の要衝は、現代も海上自衛隊や海上保安学校など防衛機能が集積しており、その位置づけに変わりはない。また、市内のバス停に立っていると、行き交う防衛庁関連の公用車が多いことに驚く。制服を身につけた海上自衛隊のセイラーマンが当たり前の風景なのである。

もちろん、「軍港」ではない現在の舞鶴港は一大漁港であり、北海道・小樽に向けてのフェリーを利用する大型貨物トラックが集結する物流拠点として賑わっている。魚が目当てなら「道の駅・舞鶴港とれとれセンター」がある。海上自衛隊の艦船を見たいなら、舞鶴港遊覧船を利用すればよい。また、湾奥にそびえる五老岳の「五老スカイタワー」から複雑な湾形を俯瞰してもいいだろう。

もうひとつ、舞鶴市の地勢的な特徴として、西地区と東地区にはっきりと集積が分かれていることがある。歴史的に西舞鶴地区は戦国末期から細川・京極・牧野氏の城下町として発展してきた。一方、東舞鶴地区は明治時代に軍港として開発された、いわば再開発都市としての経緯がある。通りの名称には、日清戦争前の連合艦隊の軍艦名、「富士」「大門」「敷島」「三笠」等が引用されており、現在も防衛関連施設が集中するなど、この日本では限られた景観を確認できる。

この舞鶴市を代表とする地域資源が、赤レンガの建造物であり、そのレンガを学術的・建築素材的そして文化的に解釈しながら舞鶴市域の個性を伝えようとしているのが「舞鶴市立赤れんが博物館」である。もちろん同館そのものが旧舞鶴海軍兵器廠魚形水雷庫として明治36年に建設された赤レンガ製の倉庫である。鉄骨構造のレンガ構築物としては最古のもので、同市の指定文化財にも指定されている。



赤れんが博物館の外観

次へ

赤レンガ博物館

赤れんが博物館 レポート（2）

さて、舞鶴＝赤れんがの町とアピールできるのは、市内の約130カ所に現存する赤レンガを使った構造物にある。「赤れんが博物館」のように現在も建物空間として活用されているものから、倉庫やトンネルや橋梁、敷石まで、適用範囲は多岐に及び、場所もまた広く市内各所に点在している。

レンガの建造物といえば、小樽、横浜、横須賀、関門等、旧軍港あるいは歴史ある貿易港に多い。なかでも町のあちこちに現存しているといえば舞鶴が最大の規模なのである。実は大正時代は銀座にレンガ街ができるなど都市では馴染みのある建築だったが、関東大震災で地震に弱いことが指摘され、それ以降は外壁等の仕上げ材料としての用途に限定された。さらに多くの都市が太平洋戦争の戦災で都市資源を消失した中で、軍港であった舞鶴もまた昭和20年7月に米軍の空襲を受けているのだが、艦船が攻撃の対象になったせいか奇跡的に構造物への被害は限られたのである。

このように、赤レンガの建物は、軍国日本の、明治から昭和の戦争の時代を想起させてしまう。時代が変わってもそれが町のあちこちで見かけられるのは、その時代を記憶する住民にとって決して好ましいとは言えなかったという（舞鶴海軍工廠の空襲では、女子や学生など非戦闘員が97人も死亡している）。軍港として開かれて、その発展と繁栄を象徴する地域を代表する赤レンガの建物群の景観が、歴史の転換で負の遺構に変わっていたのである。

そのポジションが再評価されたのは、平成元年以降のリゾートブーム、例の「リゾート法」と好景気に乗った一大消費時代の到来がきっかけとなった。「丹後リゾート構想」における重点整備地区として、赤れんが倉庫群の活用が組み込まれたのがきっかけである。ここから、平成2年には赤れんがを活かしたまちづくりが官民で検討されるようになり、同年には「まいづる探偵団」（市の若手職員のまちづくり自主研究グループが母体）が結成され、学の専門家を加えての赤れんが資源調査が行われた。その結果、「赤煉瓦シンポジウム」を開催、赤れんがの建物保存活動と地域に根ざしたまちづくりを、他地域で同様の活動を行っているグループや個人と交流を図りながらその具体化を進める「赤煉瓦ネットワーク」と、市の職員と市民と一緒に活動を行う「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」が発足。赤れんがの町・舞鶴をアピールするイベントや啓発活動に取り組んだ。その中で、レンガをテーマとする博物館の建設気運が盛り上がり、市政50周年のタイミングを受けた事業として市が検討をスタート。平成5年11月に旧舞鶴海軍兵器廠魚形水雷庫を改装してのオープンとなったのである。同年は約7万人の来場で賑わった。

（現在までの動向は「赤煉瓦倶楽部・舞鶴」のサイトに詳細がある。）

以上のような知識を持たずに同館を訪れたとしても、隣接する「舞鶴市政記念館」、「舞鶴倉庫北吸五号倉庫」、「同六号倉庫」や自衛隊関連施設によって、赤れんがの建造物が舞鶴市ならではの地域資源であることが体感できるだろう。



次へ

赤レンガ博物館

赤レンガ博物館 レポート（3）

赤レンガ博物館のコンテンツは極めて実直であり、学究的にも本格的である。遊びやエンターテインメントのテイストはほとんど感じられない。レンガという、建設関係者＝ビジネスに直接関係する以外の人には興味を持ちにくい素材を、自然科学、都市工学、考古学の分野で国際的な視点から収集・展示を行っている。もちろん、地元・舞鶴の赤レンガ資源に関する情報もカバーされている。一言で言うなら、レンガを知って語れるようになりたいのならここで1日を過ごせばよい。そんな専門性と地元性に富んだ展示構成となっている。

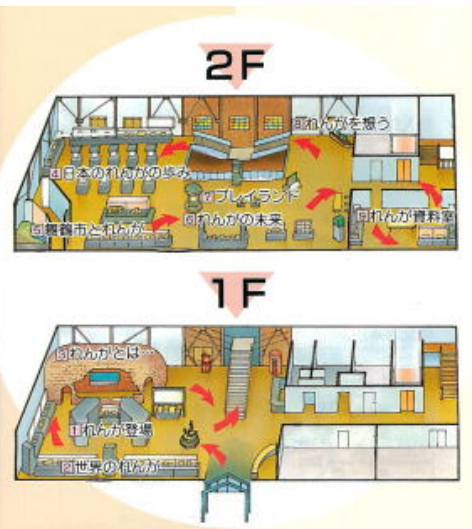
実は、前述のように赤レンガの建造物に対する負のイメージから、赤レンガを地元を代表する資源としての専門博物館の建設には当初反対の声を少なかつたという。転用する建物自体、旧海軍の武器庫なのである。また、赤レンガそのものをテーマにすることの無理解もあったようだ。赤レンガで博物館になりえるのか。それを目当てに人がやってくるのか・・・。

こうした不安の声を解消すべく、地域を代表する資源をグローバルに見つめながら、展示をレプリカやCGに頼らず、すべて本物を用意するなど、本格的な博物館としての王道を選択したのである。事業費は7億円だが、内容や企画展の活動からすると妥当と思われる。

赤レンガ博物館は、実は現在、休館中である。明治36年（1903）の建設というから既に100年を超えており、2004年度末まで半年をかけて現在の耐震基準に合わせての補強や、鉄骨柱脚部のさび除去、再塗装等のリニューアルが行われている。休館中、展示物から約100点が隣接する舞鶴市政記念館で公開されている。よって2005年4月1日の再オープンでは展示構成の変更が行われる可能性もある。現状の基本的な展示構成は舞鶴市文化事業団にある[オフィシャルサイト](#)で概要が紹介されている。同館を主管する舞鶴市教育委員会社会教育部赤レンガ博物館のコンテンツの方が詳しい。

（追記：すでに赤レンガ博物館は2005年4月1日からオープンしている）

次へ



赤レンガ博物館

赤レンガ博物館 レポート（４）

取材しての印象をまとめておこう。まず、同館は2階建て、延床面積842.44㎡で、内部の展示室はコンパクトである。使用しているレンガはフランス積みと呼ばれる方法で積まれており、2階の窓枠、柱、床板などは建設当時のものだ。さらに米国カーネギー社製の鋼鉄材を使用した施設としても最古クラスになるという。

1階はれんがについての基本的な知識を得る場である。まずれんがの歴史を4大文明に遡って解説。その上で、万里の長城や古代ローマ遺跡など、世界的なレンガの建造物を紹介する。れんがを焼くホフマン式の「れんが窯」を再現したシアターでは、そうしたストーリーを映像で確認できる。展示品はすべて実物で、古代ローマの公共広場に使用していた「フォロ・ロマーノ」、バチカンのサン・ピエトロ大聖堂に使われているもの、ローマ時代のイギリス・ドーバーの城壁に使用していたもの、万里の長城に使っていたものなど、世界各地から25品以上を展示する。舞鶴にフォーカスしたローカルの展示だと思っていたのだが、最初から世界遺産を見せられたようで、その本格性に驚いてしまう。

順路となる2階では、日本と舞鶴のレンガにフォーカスする。中国大陸から渡ってきた日本のレンガの製造と活用の歴史がパネルや模型、実物等で解説されている。天平時代の実物展示もある。そこから、ようやく舞鶴市とレンガについての歴史やパノラマ、模型等による保存状況が紹介される。以上の流れから、なぜ舞鶴が日本有数の赤れんがの町で、地域を代表する資源なのかを理解できる。

また、れんが資料室には、子供向け、一般向けと分けて同館オリジナルの解説書類が用意されている。展示を見ただ上で、これらのドキュメント類に目を通す理解がいつそう深まる。

同館では毎年企画展を開いているが、これもまた本格的なテーマと展示が行われている。その充実のためには、学芸員が実際に海外まで足を運んで調査・収集等を行うという。

1997年「チャンパ王国とれんが ～ベトナムの古代遺跡～」

1999年「旧新橋停車場と赤れんが ～明治時代の鉄道をふりかえる～」

2000年「古代オリエント文明とれんが ～世界最古の文明を訪ねる～」

2002年「中国のれんがと建築」

企画展のオフィシャルガイドブックもまた本格的な編集となっており、資料性は高い。バックナンバーは残部のみミュージアムショップで販売している。個人的には「チャンパ王国とれんが ～ベトナムの古代遺跡～」におけるチャンパ王国という文明の存在、「旧新橋停車場と赤れんが ～明治時代の鉄道をふりかえる～」での明治時代の駅舎における赤レンガ利用に新たな認識を得ることができた。

赤れんが博物館は舞鶴市の観光案内には必ず紹介があり、既に集客コアとなっている。物見遊山の観光客にすると、同館は“実直すぎてつまらない”との印象を持つかも知れない。また、市内のレンガ建築や遺構についても、保存のために公的な援助があるわけでもなく、同館が発行している「舞鶴のれんが建造物マップ」を見ても「滅失」（つまり取り壊された）例が少なくない。将来的には、この博物館周辺の国道27号沿いにある12棟からなる倉庫群（一部では夜間のライトアップもある）や自衛隊等の公的な管理が可能な物件以外、何らかの対策がないとその姿を残していくのは厳しいだろう。

それもまた建造物の運命かもしれない。土を焼いて生ま



館内の様子



れたレンガは土に帰る。しかし、レンガを真っ正面から捉えた博物館として、同館の価値は必要性はさらに高まるだろう。つまり、地域資源のレンガ建造物が減っても、多数のレンガ建造物を欲した地域の歴史は消失しない。コストや法制度から、次の時代にレンガ建造物がどうなるかはわからないが、地域資源としてしっかりとした認識さえあれば、再生・新設を求める活動も可能ではないだろうか。展示の最終コーナーの「れんがの現在と未来」では、次のようにその将来を位置付けている。

「近年町の景観がレンガによって彩られることが多くなった。そのアンティークな雰囲気が見直され、各地でレンガ建造物がリニューアルされている。レンガは単材の組み合わせの工夫によって自由に造形できるなど他にはない魅力がある。今後はその仲間であるタイル、ガラス、セラミックなどと各分野で大きく貢献すると期待されている」。

赤れんが博物館は、地域の将来を考えるきっかけとしての役割も果たしているともいえよう。



[始めに戻る](#)